

特集『法華経』の歴史的意義と21世紀における役割

■中国社会科学院世界宗教研究所とのシンポジウムより

日中共同シンポジウム開催にあたって

森田康夫

このたび中国における最高の研究機関である中国社会科学学院の世界宗教研究所と私どもの東洋哲学研究所が共同でシンポジウムを開催することができ、誠に光栄に存じています。同研究所は、宗教研究における中国の専門国家機関であり、前所長の呉雲貴先生はじめ楊曾文先生、何勁松先生の三人の権威ある先生方がご参加くださり、厚く御礼申し上げます。

ここで若干、中国側の諸先生のご紹介、ならびに開

催までの経緯と趣旨を述べさせていただきます。

前所長の呉雲貴先生は、イスラム教研究で著名な方であり、中国社会科学院の職責の他に、國務院学位委員会評議会のメンバーであり、中国宗教学会常務副会長、国際科学委員会副会長などを兼任されています。

楊曾文先生は、仏教研究で著名な方であり、世界宗教研究所仏教研究室主任として中国における仏教研究を指導されています。日本の京都大学、アメリカのコ

ーネル大学などで在外研究を重ねられ、中国仏教史、日本仏教史などの多くの著書があります。

何勁松先生は、新進気鋭の学者であり、世界宗教研究所仏教文化芸術室の副主任をされており、中国文化圏における諸国の仏教の比較研究などをされており、著書に『日蓮論』『創価学会の理念と実践』などがあります。

次に開催までの経過ですが、当研究所と中国社会科学院世界宗教研究所とは、一九九二年十月に学術交流協定を締結し、本年はちょうど満七年になるところから、それを記念するシンポジウムを昨年提案させていただきましたところ、世界宗教研究所から快諾のご返事をいただき、実現の運びとなった次第であります。

そして、今回のシンポジウムのテーマを『法華経』にした理由は、二十一世紀を前にして、人類はさまざまな地球的問題群に逢着しておりますが、それを解決する智慧が、仏教思想、なかならずその中心的經典である『法華経』にあるのではないかと大きな期待からであります。今回のシンポジウムにおきまして、『法華経』

が中国や日本においてどのように“精神の糧”となってきたのかを論究していただき、仏教を伝えていただいた中国の恩恵に心から感謝するとともに、『法華経』の理念をともしどもに人類の未来のために役立てていきたいと念願するものであります。

今回のシンポジウムは、釈尊、中国の天台、日蓮大聖人、創価学会という仏教史の上から、『法華経』の理念を掘り下げ、検討していく場を提供するものとなっております。このディスカッションを通して、議論を深めていただき、今後、人類の未来のために両研究所が協力して貢献していく出発点になれば、これ以上のよろこびはございません。

(もりた やすお／東洋哲学研究所代表理事)

発展する中国社会科学院世界宗教研究所

呉雲貴

菅野博史 訳

尊敬する日本の財団法人、東洋哲学研究所の代表理事、森田康夫先生、所長、川田洋一先生、そして皆様。

このたび、友好的な隣国、日本を再び訪問する機会が与えられ、私は非常に光榮に思う。はじめにこの機会を借りて、私たち三人の中国の学者を日本訪問と交流に、心のこもったご招待をいただいた主催者、日本の財団法人・東洋哲学研究所代表理事の森田康夫先生、所長の川田洋一先生に対して、衷心からの感謝を申し上げる。また会議にご参加の日本の専門家、学术界の同僚の方々に對して、心からのご挨拶を申し上げる。

ける。

長年にわたる国外の学术界との交流の中で、若干の友人たちがいつも私に次のような問題を提起した。中国共産党はけつして宗教を信仰しないのに、どうして多大な精力を使つて宗教を研究するのか。中国で宗教を研究するのは、ただ宗教の滅亡を促進させるという功利主義的な目的だけのためのものなのか。その他これに類した誤解に對して、私はさまざまな場合においていくらかの解釈をしたことがあるが、詳しく説明を加える機会がずっとなかった。この機会を借りて、私

は我が世界宗教研究所の成立と発展の概況について簡潔な回顧と紹介をしたいと思います。このことはいくつかの事実と認識を明らかにするのに助けとなるかもしれない。当然、さらに重要な目的は、やはりコミュニケーションをはかることによって、日本の学术界の同僚との相互理解を増進させ、友好を深め、広範な学术交流と協力を展開することである。私は主に三つの問題に重点をおいて話をしたいと思います。

一 世界宗教研究所の成立の趣旨

我が国は多くの民族、多くの宗教信仰の共存する長い文明の歴史を持つ国である。歴史上、土着の道教、民間宗教のほかに、仏教、キリスト教、イスラーム教の世界三大宗教もすべて異なる時期に中華の大地に伝来し、この国土に根を下ろし、花を咲かせ、実を結んだ。さまざまな宗教はみな特有の方法によって、中国の社会生活に對して、中国人の知性と行動に對して、広範で持続的な影響を生み出した。非常に長い歴史の発展の中で、土着の宗教か外国の宗教かを問わず、中

国の社会環境への適應という問題があった。これはまさしく土着化、民族化、中国化の過程において、さまざまな宗教の文化と中国本土の文化とがたがいに吸収し、たがいに補い、ともに繁榮し、私たちが今日言うところの多元一体（多くの異なるものが渾然一体となっていること―訳者注）、和して同ぜず（調和するが、それぞれの個性を失わないこと―訳者注）の中国の伝統文化を形成した。ゆえに、ある意味では、宗教を理解することは、また中国文化を理解することであり、宗教を研究することは、またまさしく一つの局面から、中国社会、中国文化に對する研究を深め、その健全な発展を促進させるためなのである。

しかしながら、上述の理念は、けつしてはじめから明確であつたのではなく、科学研究の実践の中でしだいに感得されたものである。はじめに故毛沢東主席の一つの重要な指示によって、認識の深化がもたらされた。一九六三年、彼は、外国研究を強めることに關する報告への指示の中で、深く広い影響を持つ世界の三大宗教に對する研究を強化するべきであることを提起

し、宗教を研究せず、神学を理解しなければ、哲学史、文学史、あるいは世界史をしつかりと書くことはできないと明示した。一九六四年九月、主席の指示の精神に従って、世界宗教研究所は成立を宣言した。それから我が国にはじめて宗教研究の専門家集団ができ、国家の「俸禄」によって支えられ、同時に国家に対して責任を持つ宗教の研究機関ができた。研究所設立のはじめは、世界宗教研究所にはただ三つの研究室しかない、研究員も二十人に達せず、体制上は、当時の哲学社会科学部（中国社会科学院の前身）に隷属していた。研究の仕事が開始したばかりのとき、文化大革命によって中止を迫られた。「文革」収束後、我が国の人民は、長い間待ち望んだ改革開放の新しい時期を迎え、社会環境の巨大な変化とそれに対応する政策の調整は、国民の伝統的な宗教観念を変え、それは回復したばかりの宗教研究の事業の発展に対して、有利な条件を生み出し、正確な方向を定めた。今日、私たちが世界宗教研究所の辿ってきた道のりを回顧すると、もとより研究員の増加（現在八十人近くいる）、研究領域の拡大、研

究成果の絶え間ない発表に対して安堵しているが、さらに私たちが喜ばせるものは、私たちの研究対象に対する認識が、以前のいかなる時期よりも、さらに客観的になり、全面的になり、成熟に向かっていくことであり、さらに実際と接近し、合致していることである。概して言えば、私たちは今日、宗教研究に対する基本的な共通認識を持っている。すなわち、全面的に、歴史的に、弁証法的に、複雑多様で豊かな文化内容を備える人類の宗教現象を認識することを主張することである。ただ信仰体系としてのさまざまな宗教の意識形態を引き続き重視、研究するだけでなく、大きな力を注いで多くの宗教の伝統として現われている宗教の文化体系を研究、理解しなければならず、さらに宗教の文化を担うものとしてのさまざまな宗教の信仰者の社会集団に密接に注意を払い、それと相互の尊重、親密で良好な関係を作り上げなければならない。もし研究所設立の初期に定めた研究の趣旨が、当時の宗教に対する偏った認識のために、歴史的な限界があるのを免れないならば、研究所設立の方針に対する今日の私た

ちの理解は、認識上の「突破」、「飛躍」であると言うことができる。もしどうしても短い言葉で、宗教研究の範囲と意義に対する私たちの今日の理解を概括しなければならぬならば、次のように言うことができるようである。私たちは努めて理論、歴史、現実の三つの大きな視点から人類の宗教現象を深く掘り下げ、体系的に研究しようとしているが、宗教を研究することはまた便利な言い方として「人間学」と呼ぶことができ、宗教を研究する目的はまさしく深い次元から研究主体を含む人間自身を認識し、把握するためである。

二 科学研究の管理体制と研究課題

国家の一等級の専門研究機関として、世界宗教研究所は重要な科学研究の任務を担っており、研究員には事をなそうとする強い意欲、あるいは使命感がある。際立つてよく課題を完成し、学問分野の建設を促進するために、私たちは極力、成果を出すことと人材を出すことを有機的に結びつけ、個人の専門、関心と科学研究事業の需要とを緊密に結びつけようとしている。

科学研究の管理体制については、等級をつける管理方法を採用している。研究所の垣根を越える、あるいは院の重点プロジェクトは、科学研究局を通じて社会科学院によって実施と管理が組織される。研究室を越える、あるいは研究所の重点プロジェクトは、科学研究処を通じて所長によって実施と管理が行なわれる。個人、あるいは研究室の一等級のグループのプロジェクトは研究室の主任によって実施と管理が行なわれる。経費の出所と管理体制の相違によって、我が研究所の研究員が担う課題のプロジェクトは、大体、中華社会科学基金のプロジェクト、院の重点プロジェクト、院青年基金のプロジェクト、研究所の重点プロジェクト、研究室のグループのプロジェクト、個人のプロジェクトの六種に分かれる。このほか、さらに国家の関連部門が委託するプロジェクトがあり、情報提供、政策の提案を主な内容としている。成果の質の水準を保証するために、大部分のプロジェクトに対して、ただ必要な経費を提供して支持しなければならないばかりでなく、関連部門の実施と管理によって、プロジェクトの

設立、中間の検査、プロジェクトの終結、成果の審査、出版等の多方面にわたる仕事を含んでいる。いわゆる科学研究の管理は、それぞれの研究所において、主にプロジェクトの経費、人間関係の調整、プロジェクトの実施を組織すること、科学研究に關係する行政の仕事を提供することを意味している。

科学研究の管理のもう一つの重要な内容は、成果を出すと同時に人材を輩出することを保証するために、人材の各世代によって、学問分野の建設を強めることである。このため、主に二つの方面の措置を採用している。一つは、大学卒業生を採用すること、修士、博士の大学院生を募集すること、専門の人員を選んで外国の研修に派遣すること、年末の専門業務の審査を実行すること、職階の評定等の措置によって、人材を育成、発見、抜擢し、常に科学研究の人員を充実させることである。今すでに成果が現われはじめている。我が研究所の老年世代の科学研究の主力は、基本的にすべて科学研究の実践の中で成長した、「文革」以前の大学卒業生である。たとえばこのたび団にしたがって訪

の学問分野の研究室と、二冊の定期刊行物の編集部という、全部で八つの部局機関がある。カバーする範囲と相應する研究室は、仏教、仏教文化芸術、キリスト教、イスラーム教、道教と中国の民間宗教、儒教、現代宗教と宗教学原理である。そして、学術成果を発表する場所としての二冊の定期刊行物（『世界宗教研究』と『世界宗教文化』）は、主に人材を育成し、学術思想の交流を展開する基地と窓口を提供するためのものである。我が研究所の科学研究の人材の成長は、研究室の設立と、とくに研究室の主任の懸命な仕事と分離できず、専門的な学問を身につけた多くの中青年の学者は、研究室の主任の手による育成のもとで成長したものである。良い師から立派な弟子が出ると言うが、研究室の主任は大部分、学術の基礎がしっかりしている専門家であり、またその指導下に一群の学術の主力を育成している。当然、個人の資質と仕事を敬愛する精神には相違があるので、一人一人がすべて一流の人材になることはできないし、異なる水準の人員は異なる仕事をするけれども、さまざまな誠実な労働にはすべてそれ

問した楊曾文先生は、北京大学の歴史学部を卒業し、現在すでに国の内外で著名な仏教の専門家であり、博士課程の学生の指導教授であり、著述が大変多く、業績がすぐれている。中青年（三十代、四十代の人を指す―訳者注）の科学研究の主力は、大部分が修士、博士の学位を取った大学院生であり、また国外においてある程度の期間の研究経歴がある。我が研究所で仕事をしている博士卒業生は、すでに十七名の多きに達している。たとえば、このたび団にしたがって訪問した何勁松先生は、我が研究所自身が育成した仏教専門の哲学博士であり、現在すでに中国の学術界では少し有名である。人材を育成する別の方式は、学問分野の建設の中で、良い苗を発見し、任務を厳しく課し、課題を完成させることによって、できるだけ早く人材が成長することを促すことである。この仕事は、主に研究室の主任の指導と主管のもとで完成するものであり、その功績を無視することはできない。学問分野の建設を促進するために、私たちは一等級の学問分野の宗教学のもとに、縦と横に織りなす仕組みによって、七つの二、三等級

相應の価値があり、すべて尊重されるべきである。

三 主要な科学研究の成果の評価

宗教研究は、我が国において古くからあり、まだ中断したことがないけれども、現代科学的な、体系的な宗教研究は始まりが遅く、出版のレベルが比較的低かった。中華民国初期から解放後のはじめの三十年まで、我が国の学者が比較的多く足を踏み入れた二つの領域は仏教と道教であるけれども、りっぱな成果は少なく、その他の領域の成果はさらに少ない。この種の研究は、実際の需要の状況よりひどく遅れていたが、私たちの長期にわたる精進努力を経て、現在すでに大きく変わった。たとえば、一九九四年、世界宗教研究所の設立三十周年を祝賀するために、私たちは成果の展示を行ったことがあり、研究所全体の発表した論文、文章は千余篇以上、専門著作、論著は百五十部を越えたことを発見した。もし再びこの数年の成果を加えるならば、さらに相当なものになるであろう。

上述の科学研究の成果は、もし関連した領域の統計

によれば、大体、次の十種に分類できる。①宗教史学の専門著作、②宗教哲学の著作、③宗教学の基礎理論の著作、④さまざまな主題の学術的な専門著作、⑤宗教の基礎知識を普及させるための読み物、⑥宗教の典籍と注釈の著作、⑦整理出版された宗教の古典籍、先人の著作、研究資料、⑧整理出版された宗教の出土した文物文献、⑨宗教の辞書とさまざまな工具書（辞典・年鑑・索引などの参考文献の総称―訳者注）、⑩さまざまな主題の翻訳書。

もし二等級の学問分野の分類統計の成果によれば、私たちは各学問分野のすべてにわたって、史学書、概論書、さまざまな専門著作、まじめな通俗的知識の読み物、辞書、工具書等を含む一群の基礎的著作を持っていると言うことができる。当然、基礎が相違し、人員の規模の大きさが異なることから、さらに下層の細分化された各学問分野の発展はバランスがとれておらず、ある成果はいつそう際立ち、ある成果は比較的小さいが、各学問分野は以前と比べると、無から有となり、小から大となり、すべて長足の進歩を遂げた。下

みて、現在すでにイスラーム教の研究とともに、我が研究所が優先的に発展させる重点的な学問分野に確定されており、院と研究所の両方に、それ相応の政策の支持があり、同時にいつそう高い要求と期待を提起されている。

仏教以外のその他の学問分野にもすべていくつかの代表的な成果の刊行がある。キリスト教の研究においては、任延黎などの『現代カトリック教』、卓新平『現代西洋のプロテスタント神学』、『現代西洋のカトリック神学』の三部の専門著作がもつとも重要である。イスラーム教研究においては、金宜久主編『イスラーム教史』、李興華などの『中国イスラーム教史』、呉雲貴『イスラーム教の法の概略』の影響が比較的大きい。道教と民間宗教の研究の方面の重要な成果には、任継愈主編『道藏提要』、『中国道教史』、盧国龍『中国重玄学』、『道教哲学』、大部な馬西沙・韓秉方『中国民間宗教史』が含まれる。宗教学原理の方面においては、呂大吉の『宗教学通論』と『西方宗教学說史』の影響がもつとも広範囲にわたっている。

層の細分化された各学問分野の中で、仏教研究は人も多く勢力も大きく、もつとも深く掘り下げ、成果もいつそう顕著である。仏教研究の成果には、漢伝仏教（漢族に伝わった仏教―訳者注）、藏伝仏教（チベット仏教―訳者注）、南伝上座部仏教、外国の仏教の四つの方面がある。その中で広範囲に流伝し、人々のよく知っている漢伝仏教の研究成果がもつとも豊富であり、經典文献、歴史発展、宗派、宗派の教理、仏教哲学、寺院経済、地方仏教、高僧の伝記、仏教と中国の伝統文化との関係等の領域をカバーしている。成果の評価は、人によって見方の異なる問題であり、確定的に論ずることは難しい。もし賞を獲得することや、学術界の評価の比較的高いことという規準から見れば、仏教の方面には以下のような代表的な著作がある。任継愈主編『中華大藏經』、任継愈『中国仏教史』、郭朋『中国仏教思想史』、杜繼文・魏道儒『中国禅宗通史』、魏道儒『中国華嚴宗通史』、楊曾文『日本仏教史』、『日本近現代仏教史』等である。仏教研究の規模が比較的大きく、基礎が堅実であり、成果が際立っていることにかんが

宗教学は、我が国において新興の学問分野に属している。老年・中年・青年の三世代の人々の共同努力を経て、私たちは学問分野の建設において、すでに大量の有益な仕事をしたけれども、現在、研究の水準と実際の需要とを比べると、なお相当大きな距離がある。私たちはこれから進んで行く道において、なお多くの困難と問題を抱えており、なお並々でない労力を費やさなければならぬ。現実の状況から見ると、三つの問題が顕著であり、すみやかな解決を待っている。第一に知識構成を新たにし、開拓の精神を樹立することである。二十一世紀はすぐに到来し、人類は発展過程の中で、常に多くの新しい情況、新しい問題に直面し、

私たち学問研究者が解答を出すのを求めるであろう。そのため、私たちは時代の前進にしたがって、古い知識構成を新たにし、開拓、進取の精神によって、宗教研究において、新しい貢献をなすべきである。第二に人材育成の仕事によって、後継者不足の問題を解決することである。我が研究所の科学研究の主力は、年齢が高い方に偏っており、各学問分野の先駆者は、ある

ものはすでに引退し、あるものはまだ「定年を越えて仕事」をしており、すでに新旧の人材の空白状態の兆しが出現しはじめている。私たちは、中青年の人員ができるだけ速く成長し、スムーズに老年世代の科学研究の事業を受け継ぐことを希望する。第三にすぐれた作品を生み出す意識を樹立し、高い水準の成果を多く出すことである。長年の努力を経て、私たちはすでに豊富な資料を蓄積し、一群の基礎的な著作、学術的な専門著作、権威ある工具書があり、したがって成果の水準を高めるために、基礎を定めた。しかし、国家の一等級の研究所として、低い水準で繰り返しの仕事をすることはできず、新しい領域、研究の新しい問題を開拓し、私たちのこの時代に恥じない、高水準の、入念な、先端的な学術成果を多く出す必要がある。この方面で、私たちはさらに長い道のりを歩まなければならない。

私の発言を終える前に、私は主催者の心のこもったご招待、周到な準備とお世話に対して、再び衷心からの感謝を申し上げたい。一九九二年十月、我が研究所

と東洋哲学研究所が学術交流協定を締結して以来、私たちの友好的な交流は日増しに密接になった。私たちは光栄にも、北京で山崎尚見先生、川田洋一先生等の東洋哲学研究所の責任者にお会いし、また、菅野博史教授を我が研究所の訪問学者として受け入れた。彼の研究成果は、我が研究所の季刊『世界宗教研究』に発表されたことがある。我が研究所の一部の学者も、招待を受けて東洋哲学研究所を訪問したことがある。この会議が終わった後に、何勁松博士はさらに東洋哲学研究所のお世話で、引き続き日本において三ヶ月の学術訪問を進める。これらの学術交流の活動は、すべて私たちに深い印象を留め、中日両国の学術界の相互理解と深い友誼を促進した。私は、この種の交流のさらなる展開にしたがって、私たち双方の宗教の学術研究が必ずやさらに大きな成果を得ることを信ずる。皆様、ありがとう。

(ごうんき／中国社会科学院世界宗教研究所前所長)
(訳・かんのひろし／創価大学教授)